

福原亮 敬著

「佛教諸派の成実論の研究」
学説批判

舟橋 尚哉

この度、福原亮敬博士によって「成実論の研究」という、成実論についての新研究、及び内容紹介が網羅されている大著が刊行されたことは、学界にとってまことに喜ばしいことである。成実論の研究書としては、近年、境野黄洋博士の『成実』大乘義（常盤博士還暦記念、佛教論叢所収）や宇井博士「佛敎汎論上巻——空門の自利敎」などが注目されているが、成実論全体にわたる、まとまった研究書は見あたらなかった。その意味で学界の待ち焦がれた書といっても過言ではなからう。

成実論は古くは成実宗を形成するほどに重要視された論書であるが、漢訳しか現存せず、梵文、西藏訳がともに欠けているため、中観思想の影響——例えば四百論の引用——などが多くありながら、インド的思惟のもとにこの論を的確に捉えることが困難な論書である。

さて本書は、前半は「所属学派」（第四章）や「成実の立場」（第五章）などを中心に論じており、後半（第十章以下）は「成実論の内容紹介」が主となっているが、阿毘達磨佛敎に造詣の深い著者が竜谷大学での講義をまとめたもの（二頁参照）とい

うだけあって、非常にわかりやすい文章で書かれている。まず第一章では成実論の作者、訶梨跋摩（Harivarma）の伝記が論じられている。そしてここでは訶梨跋摩の年代を宇井博士の推定に従い、紀元二五〇—三五〇年頃の人としている。

次に第四章「所属学派」では第一節曇無徳部とする説、第二節譬喩者とする説、第三節経量部とする説、第四節取長乗短とする説、第五節説一切有部とする説、第六節大衆部とする説、第七節大乘とする説と順々に破していった、最後の第八節で多聞部とする説を著者は支持し、これがもっとも妥当であるとする論じ方は平易な文章で、実に軽快に書かれており、私は大変興味深く読んだのであった。というのは、成実論は大乘のものであるのか、それとも小乗のものであるのか、しばしば問題となる論であるが、それはこの論書がいずれの学派に属するものなのかについて、古来より種々の異説があり、いまだ決定的論拠が見あたらなからである。私はかつて宇井博士の推定をもとにして、「成実論は大乘の空思想の影響を受けた経量部の思想であると考えられる」（拙稿「成実論の無我説とその思想史的位置」、印度学佛敎研究第十三卷第一号所収）と述べたが、今、著者が多聞部のものに属すると推定していることも見のがすことができず、私自身もこの問題を検討してみたいと思っている。

第七節の大乘とする説では、境野黄洋博士の「羅什以後一般学者の所説は、三論と『成実』の区別をしていない。二者共に竜樹系統の学説として、相異なるものとは、考えてはいなかつ

たというのが、事実の真相であって、智藏等の三大法師に至りて、此の学説が大成した」（境野博士、前掲書一二八頁）という文をわかりやすく書きなおして引用し（四〇頁参照）、それにもとづいて「成実大乘義が鳩摩羅什の翻訳の時から通用していたように見うけられる」（四〇頁参照）が、「はたして今日の学究上、成実を大乘説としてよいであろうか」（四〇頁参照）、という疑問を著者は、投げかけている。

また著者は「成実の空ではなお不空を説かないと言うが、上に掲げた「八解脱品」の文は不空を説くものである。……かくて『成実論』は大乘を宗とするとの説が有力とみられるようであるが、実は之に賛同することを私は差控えたい」（四八頁参照）と述べているが、私も以前「成実論における無とか空とかはものを分析していつて、ついには都無になるような、いわゆる析色入空観（析空観）によるものといわねばならない」（拙稿前掲書二四〇頁参照）といつて、成実論には大乘的要素は多く見出されるが、——例えば人法二無我（空観、無我観）、空亦復空（空心の滅）など——そこに説かれている空思想は大乘でいうような本来空と同一ではなく、析空観的な空が根柢となっているように思われる。すなわち、成実論には「空心を滅する」というような、大乘の「空亦復空」に相当するような記述が見出されるが、これをもって直ちに大乘の論であると決定することはできないのである。

第五章は成実論の立場を各教義の上から一つ一つ検討したものであるが、その中で第二節の五蘊の次第に私は大変興味をお

ぼえた。というのは「阿含部の經典にも、阿毘達磨論書にも五陰（五蘊）が説かれるが、その順序は色・受・想・行・識となっている」（六二頁参照）。しかし今、成実論では色論、識論、想論、受論、行陰論の順序で説かれている。この次第につき宇井博士は

「色識想受行となすのは一方に於いては想受行は色識の間に於て起るものであるから色識を先とするのではあるが、然し同時に他方からいえば色論識論にありては他説を弁難折微する所が多い為に初めに置き、他の三は唯詳説を述ぶるに過ぎない如きものである為に後になしたのである」（国訳一切経、論集部三、解題十頁）（本書六三頁参照）

といつておられるが、この説に対し著者は「一応首肯しうるものがある」（六三頁参照）といいながら、その後でそれでは「何故に二法の後で受想行としなかつたか。又行受想とか行想受としなかつたか」（六三頁参照）という疑問を提示し、「私見によれば別に示す如く、十二入を一切であるという経文があり、それを重視して、初めに色識（物質と精神）に撰められる一切という意味から色識を初めに出したものと思う。そして色識の次に主要な心所として想・受を出し、最後には色・識に入らない諸法（不相応行法）と想・受ほどには主要でない其他の心所の何れをも含んだ有為法として、行を出すものであろう。即ちこれは、五位の順序に当てはめて、色・心・心所・不相応行の前四を、念頭に置いて、色・識・想・受・行の五を開いて出したものである。そして受・想の

中、想を先きに出すのは、受よりも修行道の観点からは、想が一層主要であると考えられたからではなからうか。」（六四頁参照）

と論じられている。確かに成実論には「十二入を一切である」という経文があり、また「十二入を実である」と説くところは、

「若し種〔四大種〕は是れ実なりと説くに随わば、則ち十二入等は応に是れ実なるべからざればなり」（非彼証品第四十参照、大正三二、二六三上）

「若し入等を縁せば是れを総相智と名づく。総相智なるが故に能く一切を縁す。所以は何ぞ、若し十二入を説かば則ち、更に餘法なければなり。故に知る此の智は亦、自体をも縁するなり」（一切縁品第九十一参照、大正三二、三六四上）

とあるから（拙稿前掲書二四二頁参照）、著者の推定は正しいように思う。

次に第六章究竟の宗趣では、稲葉円成氏の「龍樹と訶梨跋摩との空思想に就て」（無尽燈十八卷、十）を引用し、

『中観論』と『成実論』との間には、大乘と小乗というような大きな溝渠はない、と結ぶ。そして両論の立場の相違を示して、龍樹の空思想と、跋摩の空思想とは、はなはだよく似通ったものと述べている。私はこれに全く同感である」

と著者は語っている。そして続いて、

「私に考えるに『中観論』は大乘経に立っている。しかるに成実は主として阿含部の經典に拠り、大乘の經典は引用しな

い（ただ大乘論は引用する）が、空思想は両者相通する」

という著者自身の見解を述べておられることも大体において正しいように思う。（先にも述べたように、成実論の空と大乘でいう空との相違は、析空観的であるか、本来空であるかの相違点だけを注意すれば、それでよいように思う。しかしそれでは大乘で析空観的記述がないかというに、必ずしもそうではない。しかし析空観的記述と同時に、本来空の記述も説かれておれば、一応大乘の論書と判断してもよからう。）へなおこの点については拙稿「成実論の無我説と三心について」（大谷学報第四十四卷第二号、四〇―四一参照、特に注十二、四九頁）を参照して頂きたい。

さて宇井博士は「一切縁品」一九一の十空について、

「空は二空三空四空六空七空十一空十三空十六空十八空に区別れるも、特に十空となすことは通常は行われず。」（本書九七頁参照、国訳一切経、論集部三、四一二頁脚註参照とあるは五一二頁の誤まりかと思う。もっともこれは国訳一切経自体のミスプリントによるものではあるが……）
とっておられるが、著者はこの点を鋭くつき

「これは『婆沙論』を調査せぬ為め、この十空は『婆沙論』の名称を受けている。」（本書九八頁参照）

と宇井博士の誤謬を指摘しておられる。この点について私も以前（昭和三十九年五月）、「成実論の無我説とその思想史的位置」（印度学佛教学研究第十三卷第一号）において、成実論の空思想を論ずる中で、

「例えば大毘婆沙論第八には『十種空とは謂く、内空、外空、内外空、有為空、無為空、散壊空、本性空、無際空、勝義空、空空』と出ている」(拙稿前掲書二四一頁参照)

と述べたことがある。

第八章の題号の意義では、『成実論』の原語は：Satyasiddhi-sāstra”であると推定されている」(本書一一八頁参照)と述べておられるが、「梵語の原典もチベット訳も存していないし、漢語から推定することが困難である」(本書一一八頁参照)と著者もいわれるように、これはあくまでも推定にすぎない。しかし成実論の還元梵語を試みておられるラーデル博士も、「Harivarnan's Satyasiddhi-sāstra (Philosophy East and West 5-4, 1956)」とごつておられるし、また著者もいっように、「Richard H. Robinson の著わした『Early Madhyamika in India and China』」において Satyasiddhi-sāstra として『成実論』を引用するところが二十回にも及んでいる」(本書一一八頁参照)のであるから、新たな資料が出ない限り、現在の資料から判断すれば、成実論の原語は Satyasiddhi-sāstra であると考えられる。

次に第九章第四節では十種の異論として、成実論が毘曇(有部)や他の学派の説と異なった説であることが説かれている。例えば(一)二世有無論では、毘曇の説に反対し「毘曇(有部)には、三世実有と主張し、作用に三世の別が有るが、法体は三世に実有であるとする。その立場を「二世無品」第二十二で述べる。しかるに『成実論』では、過去は已に滅し、未来法は未だ生ぜ

ず、作用の存せぬことを明かし、現在刹那の法は、因縁生の上の体用があるとす。」(本書一三五頁参照)といつて、現在有体、過未無体が語られている。また(二)一切有無論では「十二処のみの実」が説かれているが、これは成実論独特の説であり、注目に価する。

以上が本書の前半九章、いわゆる研究論文形式の個所であるが、そこには著者の新研究が処処に見られ、大変興味深く読ませて頂いた。後半はいわゆる内容紹介が主となっているように思われる。

さて、第十章は成実論の組織を科文別にし、一覽できるようにされている。成実論を研究する者は、この科文を座右に置いておくと非常に便利である。

第十一章は本論の解説とあるように成実論の内容紹介である。第一節法体有空論では「有とは佛の十二入を説いて名づけて一切と為すものにして、是の一切は有なり」(本書一五九頁参照)とあり、先にも述べる如く、これは成実論の独特の説である。すなわち「十二処のみの実」を説くものとして重要視すべき記述である。第二節色法論では四大の仮実などが問題となり、第三節心法論、第四節心数論、第五節煩惱論、第六節不相応行論、第七節輪廻論の順序で説かれている。第八節証果論では、(一)滅仮名心において、著者は『成実論』の滅三心の理は、私の見るところ、中観派の説を参照して『婆沙論』の説を發展させたもの」と語っておられるように、中観説特に二諦説(勝義諦、世俗諦)との関連性が深いようである。この三心については私

はかつて「成実論の三心と三性説との関係について」（印度学佛教学研究第十一卷第一号）という論文を発表したが、それはラーデル博士の示唆によるところが大きい。この問題はまたいづれ厳密な比較対照研究など、種々の総合的研究の中から結論が導き出されるものと考えている。

以上、福原博士の「成実論の研究」を読んで、私の感ずるままに述べてきたのであるが、成実論の研究書として、まとまったものがない現今において、本書刊行の意義は大きい。原始佛

教より大乘佛教に展開していく過程の阿毘達磨時代において、重要な役割を果たしたと考えられる多聞部や経量部などの思想があまりにも不明瞭な点が多い今日、成実論の研究はこれらに何らかの解決の糸口を与えてくれるのではなからうか。その意味で成実論の研究は必要であり、阿毘達磨佛教や初期唯識思想を研究せんとする者にとって、無関心ではいられない論書といわねばならない。

（昭和四十四年十二月、永田文昌堂・A5版、三、二〇〇円）